

# 強者の戦略

## 【解答例】

武士の戦闘者としての在り方を強調する従来の鎌倉時代からの武士道は、戦場で恥辱を避け武名をあげることを理想とするものだった。そこでは、主君への命がけの献身である滅私奉公が最大の美德とされた。山鹿素行は、このような武士道を批判して、武士は戦闘者である前にまず徳を体現する存在でなければならないとする、新たな武士道、すなわち「士道」を説いた。素行によれば、武士の使命は、農・工・商三民を率いる長として、「道」を実践することにある。もとより、素行は、主君への忠義の重要性を否定するわけではない。しかし彼は、在来の武士道が主君の行状に無批判的であることを批判する。素行によれば、もし主君が「道」を踏み誤るようなことがあれば、それを厳しく諫め、徳をめざす方向へと主君の心に向けかえることに武士の責務がある。在来の武士道が「武」と献身とを重んじるのに対して、素行の士道の特徴は道義性を重視する点にあったといえる。(399字)

## 解説

一番のポイントは何といても従来の鎌倉時代からの「武士道」が戦闘員としての心構えに力点があったことに対して、江戸時代の「士道」は平和な時代の為政者としての心構えに力点がおかれることを説明するところにあります。

まとめ方としては

1. 時代別に区分(争いが絶えない時代・平和な時代)
  2. 武士道・士道の特徴(それぞれの時代に求められているものが何かを浮き彫りにする)
  3. 江戸時代の士道について2つを比較する(山本流士道と山鹿流士道)
  4. 武家社会のイメージと現実を考える
- の4項目になります。

では沿革を考えてみましょう。1615年に大坂の役

が終了し、元和堰武(げんなえんぶ)と呼ばれる平和な時代が訪れ、戦乱の世が終わりを告げることとなりましたが、それ以前の戦乱の時代においては、武士は戦闘員としての生き方、倫理観が要求されていました。つまりは「武家のならい」とか「弓馬の道」、「武士(もののふ)の道」などと表現されるものです。これらを平和な時代になっても懐かしみ、頑固に守り通そうとした人物がいました。山本常朝です。彼はその言行録『葉隠(はがくれ)』の中で、「武士道というは死ぬことと見付けたり」と表現しました。この部分がいわゆる従来の武士道です。

たしかに戦国時代などにおいては、領国支配を果たさねばならなかった武士の現実的要請が意識されていましたが、平和な時代への移行とともに、武士は専ら社会の支配層としての役割に対応することが求められるようになりました。先に紹介した1615年以降の天下泰平の世の到来です。この時代においては、為政者の立場として三民(農民・職人・商人)を教導する武士の姿が求められるようになりました。兵学者であり、古学派に属する思想家として登場した山鹿素行の考えがこれにあたります。彼は、武士は万民の道徳的な手本として存在理由がある、との認識を示し、これを儒教(古学)の立場から展開したのが、「士道」ということになります。

江戸時代における武士とはすなわち、人倫の道の実践者であり、文治政治の責任者という位置づけであると考えてみると分かりやすくなると思います。したがって、素行は、武士に倫理的自覚を求め、高貴な人格の形成を期待したという訳です。

主君に忠義を貫くというイメージが武家社会のイメージであると思いますが、実際のところは「御家第一主義」=平和な時代であればこそ、「個人」より「家の存続」を重んじることを重視しているところから、時には主君を諫めてこそ忠義の道である、と

# 強者の戦略

いうところをおさえるようにしましょう。

これらをまとめると正解に近づくことができると  
思います。最後に武士道⇨山本流士道と山鹿流士道  
はどちらが正しいとも言えないということを強調し  
ておきます。平和な時代であるが故に、今こそ武士  
道の精神を忘れてはならないと考えた山本常朝も正  
論でありますし、平和な時代であるが故に今求めら  
れている為政者としての理想の武士像を考えたと山鹿  
素行も正しい見解を述べていると言えます。同時代  
の二つの見解のそれぞれ根拠となる部分を比較し、  
さらに時代を超えた比較でもってまとめあげてゆく  
ようにしてください。